

# FEMME POLITIQUE

ファム

ポリティック

女だから、政治

## CONTENTS No.51

「ホリエモン」はほんとに悪いのか? ——— 2

財政に強くなる①大蔵省は信頼できない! ——— 6

書評 えひめ丸事件 ——— 9

ここ30年の女たち

●ウーマン・リブとは自分を生きること 田中美津 —10

●女たちは「解放」されたのか 樋口恵子 ——— 14

「ジェンダー」をめぐる騒動

●国分寺市民は立派だ! 上野千鶴子 ——— 18

# 「ホリエモン」は ほんとに悪いのか？

田中喜美子

ホリエモンこと堀江貴文氏は、ほんとうに犯罪を犯したのだろうか？「ライブドア」に対するあまりにも迅速な東京地検の動きは、逆に不審の念を誘う。そもそも「株式分割」とは何だ。「投資事業組合」とは何だ。そして「ライブドア」とは何なんだ？

## ライブドアの本業

ライブドアの出自は、1996年、出資金600万円で設立された有限会社「オン・ザ・エッジ」である。企業のホームページの制作、ネットシネマの広告、電子メールの広告サービスなど、IT企業として急速に業績をのばし、1997年、はやくも資本金1000万円の株式会社となり、2000年には東京証券取引所マザーズに株を上場した。しかしこのころからこの会社は、もっぱら「株式交換」によるM&A（企業買収）や「株式分割」による錬金術のめりこむようになり、出発当初の本業は、むしろそのかくれみのとして役立つようになっていく。

## 「株式分割」の

### 錬金術

ライブドアの錬金術のひとつ

つ、「株式分割」とはいったいいかなるものか。

2001年から4年までの3年間に、ライブドアは3分割、10分割、100分割、10分割と、4回にもわたる株式分割を行ない、その1株は3万株に増殖した。

「分割」が利益を生み出すカラクリは次のようなものである。

たとえば1株を100株に分割するとする。単価10万円の株であれば、分割された株の値段は、建て前としてはその100分の1の10000円ということになる。

以前1株10万円でなければ手に入らなかった株が10000円で手に入るとなれば、それだけ買いやすくなって、その株の人気は上がる。

ここで見逃してはならないのは、つい最近まで、分割発表後50日経ってからでないとして新株が発行できない規定があったことで、そのためこの期間、株が品薄になり、需給

のアンバランスが必然的に株価を吊り上げる結果となる。もちろん新株が市場に出回ると株価は急落するから、玄人はこの2か月間に、高値で株を巧妙に「売り抜け」る。

もちろんライブドアばかりでなく、分割による株価上昇でもうけようとする企業は多く、05年3月から今年の2月までに360もの企業が株式分割に踏み切った。

今年の1月、分割発表から新株発行までの期限が発表の翌日に変えられたのは、「分割」に伴う錬金術があまりにも目にあまるものとなったからにはほかならない。

しかしそのときすでにライブドア株の総数は10億5000万、堀江氏の錬金術は所期の目的を達していた。

## 錬金術のツール 「投資事業組合」

こうした錬金術のツールとして便利に使われたのが「投資事業組合」である。

この組織はいったい何なのか。

「組合」などというからわけがわからなくなる。基本的にこれは、機関投資家や個人投資家から金を集め、それを運用して株を売買し、利益を投資家に還元する組織――要

するに一種の「株屋」なのである。

大会社はたいいてい、自前の「投資事業組合」を抱えている。「ライブドア」もまたそうした「投資事業組合」のいくつかを便利に使い回し、さまざまマネーゲームを行なってきた。

もちろん、日興証券のような大きな証券会社も、「○○ファンド」と呼ばれる組織も、ひらたくいえば「株屋」である。ただし証券会社や「○○ファンド」と「投資事業組合」との大きな差は、前者は一応、出資者への情報開示を心がけるに反し、後者はそれをほとんど行なわないというところにある。

たとえば堅実な運営で知られている「さわかみファンド」は、実に月2回もの頻度で通信を発行している。しかし「投資事業組合」の多くは年1回報告書を発行する程度で、その運用内容の細部はほとんど明らかにされていない。

ところがそれがまた、この組織に金のあつまる所以であって、世間の目につかないかたちで特定の依頼人のために株を売買し、ときにはあくどい操作も唯々諾々とやってくる便利さが特徴なのだ。もつとも規模の大小をとわ

ず、「株屋」が実際に内部でどんな運用を行なっているかの真相は、外部からうかがい知れない。パブルが崩壊したとき、野村証券が特定の取引先にソンをさせないよう、一般投資家にソンのつけをまわす内部操作を行なっていたことが明かされるまで世間を憤激させたことがあった。

この事件でもわかるように、たとえ大手であろうとも、こうした操作で一般投資家を欺くことがないとはいえない現実がある。

それだけに「株屋」にとつては何よりも大切なのは信用であり、運用の公正と情報開示の透明性こそが最大の価値なのであるが、ライブドアのような会社にとつては、内部で何が行なわれているかが外からは見えにくい「投資事業組合」は、だからこそ便利この上もないツールなのであった。

## 「株式交換」とM&A

ライブドアのもうひとつの錬金術に「株式交換」がある。「株式交換」というと、ふたつの会社が対等の立場で株を交換しあうように思われるが、現在ほとんどの「交換」は、ひとつの会社が他の会社

を買収して子会社にするための便法である。

はるか昔、企業買収をさかんに行っていた横井英樹氏は「乗っ取り魔」などと呼ばれて世間の指弾を受けたものである。

しかしいま、かつての乗っ取りは「M&A」の名のもとに、大手をふってまかり通るようになってきている。

ライブドアは2001年から05年の4年間に、「株式交換」を実に12回も行なっている。加えて買収も含め、驚くべく多くの会社を傘下に収めてきた。

こうして2000年以降、社員3人で発足したかつての「オン・ザ・エッジ」は、「企業買収」と「株式分割」というふたつの錬金術を駆使して、売上高約784億円、社員2456名(2005年9月)の「ライブドア」に成長した。

## 堀江氏は犯罪者なのか

ライブドアの急激な成長は、その活動がマスコミに取りあげられるようになった当初から、うさんくさい目で見られてきた。ニッポン放送株の買収にからんで、堀江氏が「時間外取

引」で株を取得したことが「違法すれすれ」などといわれもした。だがそんなことは「違法」でも、「違法すれすれ」でさえもない。それこそマスコミ一流の悪意の「風評の流布」といえるだろう。

彼が逮捕されたいま、マスコミは「偽計取引」「風評の流布」そして「粉飾決算」を数えあげているが、それらは早急な逮捕につながるほどの「犯罪」なのだろうか。

見回せば世の中至るところ、はるかに犯罪的な風評の流布や、ウソやごまかしがまかり通っているのではあるまいか。世の中には税金逃れのため黒字を赤字に見せかける会社は数多い。

その意味で多くの企業の行なっている会計操作には、何らかの意味で「たたけば埃の出る部分」があり、ライブドアだけに限ったことではない、というのはいいすぎだろうか。

ライブドアの「粉飾決算」はたしかに法に触れるものであり、その現実には捜査が進むにつれ、ますます明るみに出つつある。しかし彼らはこの操作で払わないでもよい税金まで払っており、多くの会社のやっているように「脱税」のために罪を犯したわけではない。

自分を大きくみせかけようと、牛と競争しておなかをふくらまして結局は破裂してしまった蛙のように、自分を大きく見せかけようとしてウソをつき続けた、いわばそれが堀江氏の「罪」の原点なのである(とここで黒字決算でライブドアが払った税金を、税務署は返却するのであるのか、聞いてみたいものである)。

## 商法に裏づけられた堀江氏の行動

そもそも堀江氏には「法網をくぐる」意識などほとんどなかったに違いない。むしろその学歴が示すように、「頭のいい」彼は、ここ7、8年の商法改正に潜むビジネスチャンスをいち早くキャッチし、その流れに沿って一獲千金のマネーゲームに乗り出したのだった。

株式交換によるM&Aは、99年に施行された商法改正で可能となり、大規模な株式分割は、01年の改正で解禁された。

これらすべては、日本国の「おかみ」によって行なわれた法改正であり、粉飾決算以外の堀江氏の一連の行動はすべて、法律の裏づけを持っている。

彼はいまでも、自分が間違っていたとは露ほども思っていないに違いない。

## 首相のリーダーシップの背後に

実はこれらの法改正を含む商法の改革は、「郵政民営化」をはじめ、小泉首相のリーダーシップのもとに推進されている一連の「改革」の一部なのである。

そして圧倒的多数の国民はその「改革」を支持している。05年9月の総選挙はその事実をいやというほど明らかにした。

こうして改革を進める一方、小泉首相は近隣諸国の非難にもめげず、靖国神社参拝を強行する「愛国者」ぶりを発揮し、そしてその行動もまた、彼の人気の源となっている。

そしてこの「愛国者首相」は、アメリカのブッシュ大統領とはおそろしく仲がよい。

彼はブッシュ大統領の別荘に招待された数少ない外国の首相のひとりであり、ふたりがテレビで見せつけている、最上の信頼関係で結ばれた友人同士という間柄は見せかけではない。

「愛国者」小泉首相はどのようにしてこれほどブッシュ大統領

に厚遇されているのだろうか。

## 改革はアメリカ発

「郵政民営化」を始めとし、

くない。

たとえば司法改革。裁判の迅速化のための法曹人口増加促進はさておき、日本人にはおよそなじみのない「陪審員制度」を取り入れようとする

くは、アメリカ主導のもとに行なわれたものなのだ。

小泉首相の徹底したアメリカ追随姿勢はこれまでさまざまな機会に明らかになっていくが、ことは軍事関係だけに

われなのである。

ごくまれにマスコミ紙上に現われる「この国はアメリカの属国だ」だとか、「日本はアメリカの50番目の州になったほうがよからう」などという自嘲的なコメントは、こうした現実を知る人の言葉なのだが、マスコミはそうした言葉の裏に潜む具体的な事実を絶対に伝えようとしなない。こわいからだ。

## 謎解き

アメリカ政府は毎年、日本を自分の思いどおりに改革するための具体的政策を「年次改革要望書」として発表している。

この文書は、アメリカが進めようとしている「グローバリズム」の障壁となる日本国内の制度をひとつひとつ取り上げ、アメリカの国益に沿ってそれを取り除き、あるいは作り直すため要求を堂々と記載している。

商法改正に象徴されるさまざまな「改革」は、小泉首相や竹中大臣の頭から出たものではなく、ほとんどがアメリカのこの「要望書」に基づいている。

あろうことか、一見清廉潔白・直情径行の権化のように見える日本のリーダー・小泉



西田淑子

純一郎首相こそ、アメリカの先兵としてこの国を改造しようとしている旗振りであって、彼がブッシュ大統領にあれほど「可愛がられる」のはその必然の結果なのである。

EUはアメリカ発のグローバルイズムに抵抗している。それに反し、尻尾をふって、唯々諾々とそのあとをついていく日本。

そのアメリカの目ざすものは、マネーゲームによってすべてを支配しようとするもっとも貪欲な、もっとも頹廢した資本主義である。そして世の中に「金で買えないものはない」と豪語したホリエモンは、まさにその価値観の申し子であって、アメリカ発のその価値観に追随する小泉首相が9月の総選挙で堀江氏を起用したのは、まさに志を同じくする同志の共闘であったのだ。

首相ばかりではない。堀江氏が逮捕される前、人々は彼が体現する価値観にどんな態度を取っていたか。日本経団連の会長・奥田碩氏の二転、三転したコメントが代表するように、ホリエモンの価値観に心をゆすぶられているのは若者ばかりではない。子どもときから株の売買を教えなければ——と短絡する親や教師たち、パソコン

が駆使できなければ現代に生きられない——と浮き足立つ教育委員会……。

子どもの健康な成長にとつて何がほんとうに必要なのかを考えず、子どもを電子機器づけにして子育ての義務を果たしたと考える大人たちがまたしても増えそうである。

### 最後の疑問

ここで私たちは最初の、そして最後の疑問にたどりつく。

いったいどんな力が働いて、この国の検察はあれほど素早く堀江氏の逮捕に踏み切ったのだろうか。

すでに述べたように、堀江氏の行動が「犯罪」と断定される理由は主として「粉飾決算」の面ばかりである。人々が弾劾するその他の行為のほとんどは法の裏づけがあり、むしろここ数年の法改正が鼓舞したものとさえいえる。

なのに多くの場合おそろしく腰の重い日本の司法が、これほど迅速に行動を起こした理由はどこにあるのだろうか。

そこに働いたのは小泉首相の政敵の力だと推理する人もいれば、今国会で公務員削減を目ざす政治家の動きに反発する官僚の巻き返しだと断ず

る人もいる。「ホリエモン騒動」の最後に残るこの疑問は、やがて時期がくればおのずと明らかになっていくであろう。

※

いずれにせよ、21世紀の初頭に日本をゆすぶったこの事件は、アメリカ伝来のグロ―バリズムがこの国の指導者と手を組んで「実直で勤勉」な日本人の特質を打ち壊しにかかった象徴的事件として、長く語り継がれる価値があるように思われる。

それにしても小泉純一郎という人は、なぜかくも一直線にアメリカ追隨にのめりこむのだろうか。

おそらく「力」で世界を制覇しようとするブッシュの路線が、彼の心の琴線にふれる部分があるに違いない。小泉氏の理想とする国の姿は、やはりかつての「富国強兵」路線をなぞるものなのである。

日本は「強国」になるために、アメリカのあとを追って

はならない。軍備に金をかけ、マネーゲームに憂き身をやつす国は、

どれほどGDPが伸びようとも、荒廢の一途をたどる以外にないからである。  
(たなかきみこ・「フラム・ポリテイク」編集長)

### ウズベキスタンで日本人がやったこと

カザフスタン、トルクメニスタン、タジキスタン、ウズベキスタン——これらはソ連が崩壊したとき、1991年にソ連から独立した中央アジアの国々である。

「スタン」というのは「国」という言葉。だから「ウズベキスタン」は、ウズベク人の国という意味である。

この国を訪れる日本人は、ウズベク人があまりにも自分たちに似ているので驚いてしまう。外見ばかりでなく、遠慮深く、慎み深い物腰が昔の日本人そっくり。

それとともに驚くことは、ウズベク人が実に親日的で、日本に深い尊敬と憧れを持っていることである。

もちろん日本の「成功」を見て、手本にしたいと語る発展途上国の人々は少なくない。しかしウズベキスタンの「親日」にもっとずっと深い理由がある。

ていねいに石をたたんで作った何キロもつづく石畳の道。ドライブすると「ほら、これが日本人が作った道路だよ」と教えられる。ふたつの川から水をひく、網の目のようにひろがる運河。赤レンガづくりの水力発電所。周囲の建物が突風でみな壊れてしまったときも、「日本人がつくった」その建物はビクとしなかった。

「日本人」とは敗戦後、ソ連に抑留されてこの土地に連れてこられた「捕虜」であった。老人たちはいまも語る。

「日本人とはほんとうに真面目な人たちだった。嘘をつかない人々だった。うまく行かないときには、時間がきても帰らずに、いろんな工夫をしていいものを作ってくれた。そのおかげでいまみんな、こうして暮らしているんだ。ひもじかろうと食べ物あげると、必ず手作りの木のおもちやお返しをくれた。ほんとに律儀な人たちだった」

捕虜であった日本人。彼らは最後まで、心をこめて仕事をす

る実直さを手放さなかった。施しにはお返しをする律儀さを失わなかった。いま「ホリエモン」の価値観に踊る日本人を見て、ウズベキスタンの人々は何というだろう……。

ウズベキスタンには、力尽きて死んだ捕虜たちの墓が13か所ある。墓標は、彼らの多くが若かったことを伝えている。(T)

# 大蔵省は信頼できぎない!

日本国家は借金まみれ、財政的に破綻している、という声が高い。孫子の代にはえらいことになるという。

そう聞かされるとやりきれない思いだが、その一方、税金の担い手である私たちには、どうしてこんなことになったのか、さっばりのみ込めていない。どうしてこんな「財政破綻」が起きたのか、誰がいちばん悪かったのか、何が悪かったのかということをも自分で考え、自分で原因をつきとめようと思え、とさえないでいた。

私たちは政治家を信用してはいなかった。けれど「大蔵省」（いまはふたつに分かれているが今回は「大蔵省」に統一してしまふ）は信用していた。

お役人はしっかりしている、たまには不祥事も起こすけれども、たいいていの人は「お国のために」きちんと仕事をしているに違いはない——そう思い込んでいた。とくに財政に関しては「東大出」の頭のお役人がどっさりいる大蔵省を信用してよいのだという気持ち

ちを捨て切れないうでいた。

しかし考えてみるとこの姿勢は、中身でなく、レッテルや外見で政治家や官僚を信用した戦前の国民と基本的に違ってはいないのではなかるうか。「近衛さんが首相になったからうまく行くに違いない」（近衛文麿氏が首相になった）と、わけもわからず外見のよさだけで首相を信頼したり、マスコミにあおられて「中国はけしからん、断固懲らしめねば」などと隣国に敵意を抱いたりした国民と少しも変わっていないのではなかるうか。

現在、日本は国家予算の約8倍にも上る借金づけになっている。しかもそこから抜け出すメドがついていないどころか、いや抜け出すメドさえつけようともしないまま、借金につぐ借金を重ねている。

いままさに破産寸前の人間が、金を返そうともせずにつぎつぎ借金を重ねて家を増築したり、贅沢品を買いこんだりしていると

ら、正気の沙汰とは思われまい。しかし日本は国として、それと同じ振る舞いを重ねているのではないだろうか。

## 1965年まで、日本は無借金の原則でやってきた

敗戦後の約20年間、日本国は借金をすることを極端に警戒していた。戦前、借金を重ねて破産地獄に落ち込んだ記憶が生々しかったからである。

戦後は敗戦のどさくさまぎれに、預金封鎖と新円切り替えて破局を乗り切ったものの、戦後かなりの間、政府はかつての記憶を忘れず、堅実な財政運営を心がけていた。

1947年、「財政法四条」で「公債又は借入金以外の歳入を財源としなければならぬ」——つまり国の財政を国債発行という私たちの借金に頼ってはならない、という原則を定めたのもそのためである。

どんなに苦しくとも収入の範

囲に支出を抑える——この姿勢は、原則として正しい。やむなく借金をするときは、何年かの後に元利耳を揃えて返すメドがついていなければ、借金をしてはならないのである。

ただし政府も鉄道や郵便事業など、国民生活にとって不可欠な、かつ「収益性と回収性」がある事業に関しては「建設国債」という借金のかたちを認めてはいった。国としてそれらのインフラを整備するのは当然のことで、そうしたもののための起債まで否定することはできない。

しかし原則として、47年の立法後約20年間、日本国の政府は「借金をしない」という原則を忠実に守り、借金にたよらない国家経営を行っていたのであった。

## 借金地獄への歩み

決定的な転機は1965年にやってきた。

東京オリンピック後の景気後

退のせいで、約2000億円が不足になり、年度の途中で補正予算を組み、国債を発行しなければならなくなったのである。

それでもこのときはまだ、国債発行に関する忌避感は強く、発行するなら「建設国債」でなければならぬという意識が強かった。

政府も「国債発行はすべて『建設国債』であるべき」という原則を掲げ、また国債は「市中消化」されるべきだとして、国債の累積に歯止めをかけようとしていた。

しかし「建設国債」なら許容できるというこの考え自体のなかには、実は危険が潜んでいた。ただ当時、その事実を指摘しようとする人はだれひとりいなかった。

いずれにせよ、「いったん国債財源に道をひらいた公共事業費を再びきゅうくつな税収財源にもどすことは実際上不可能である」(『日本公債論』)と経済学者の鈴木武雄氏が予言したように、65年以降、一度歯止めを外された国債発行は坂道を転げるようにはずみをつけて増えつづけていく。

70年の年度末、国債の累積残高は2兆8112億となり、71年度の発行額は1兆円を越えた。

73年から74年、第一次石油ショックの不況のなかで、財界からは赤字国債発行への要望がますます強くわきおこった。すでに景気対策としての国債発行を当然のこととして期待するムードとなっていたのである。

しかし当時の大蔵省には、安易に「赤字国債」を発行してはならないという理念的歯止めは残っていた。

### 「原則」が崩れて なだれを打つ

その「歯止め」を打ち壊す理論が現われた。

赤字国債を発行したってかまわない、その結果需要が増えて消費がさかんとなり、まわりまわって国民所得が増えて最終的に税収も伸びる、というのであった。内橋克人氏などが「俗流ケインズ学」と称するこの論は、国債発行にためらっていた政府を力づけるものであった。

こうして73年の石油ショックのせいで税収が減り、国民の反発で酒・たばこの値上げも、公共料金の値上げも流れ、追い詰められた政府は「財政特例法」を成立させて2兆905億円の特例国債(要するに赤字国債)の発行にふみきつてしまう。1975年のことである。

このときはっきり、法的に「借金をしてはならない」という65年以来的原則が打ち破られ、国債発行の歯止めがはずれてしまったのである。

### あの手この手の一時凌ぎ

借金で首のまわらない人間が、

ここがダメなら今度はこっち、と金を借りまくったり、家屋敷を売りとばしたり、果ては他人の財産にまで手をつけたり——日本政府の国債をめぐる振る舞いは、そうした個人の姿を彷彿とさせる。

国債の発行・償還を扱う機関は「国債整理基金」と呼ばれている。毎年の年度はじめに、前年度期末残高の1・6%が国債償還分として一般会計からこの基金に繰り入れられ、積み立てられることになっていった。

しかしそれもタテマエのみで、政府はバブルたけなわの82年度から89年度までの8年間、そしてバブル崩壊後の93、94年度の2年間、この繰り入れを停止していた。いまそれほど差し迫っていないから、と償還に充てるお金は棚上げにして、累計約21兆5000億円という巨額な資金を他に流用してしまったのである。

バブル経済で潤沢だった税収はどこに消えてしまったのか、細かく洗ってみたら大変な無駄遣いの構図が浮上してくるに違いない。

それでもNTTやJRが民営化されたとき、政府はその株式の売却金を国債の返済に振り向けようと試みる。しかし結局その売却金も、公共事業の財源として使われて果たされてしまう。

こうして入ってくる金は、次々と公共事業のほうに流れて行き、そして国債の償還期限がやつ

てくると、政府は新たに国債を発行して急場を切り抜けた。何のことはない、サラ金地獄に陥った人間が、古い借金を返すために新たに借金を重ね、結局借金につぐ借金で暮らしていく——日本政府はそうした生きざまを選んだのである。

### 建設国債と赤字国債

いまと比べてみると、国債発行に関して、立法府の人間も行政府の人間も、大きな錯覚にとらわれていたのだ、とわかる。それはどちらも借金であることに関わりはないのに、「建設国債」というものが不思議なほど許容され、「赤字国債」のみが悪玉扱いにされていたことである。

発行された国債を「建設国債」とするか「赤字国債」とするかは基本的に大蔵省の判断次第で、このふたつの境界線はあいまいであり、両者に本質的な差があるわけではない。事実「建設国債」として確保された資金が優先的に建設事業の経費に充てられるわけではなく、一般歳入のドンブリ勘定のなかに組み込まれて単なる数字合わせと化してしまう場合もあるという。

いずれにせよ、「建設」というコトバを冠すると、人々が不思議に寛大に借金を許容するのは、田中角栄氏以来の「土建国家」の伝統が脈々と生きつづけているから

である。

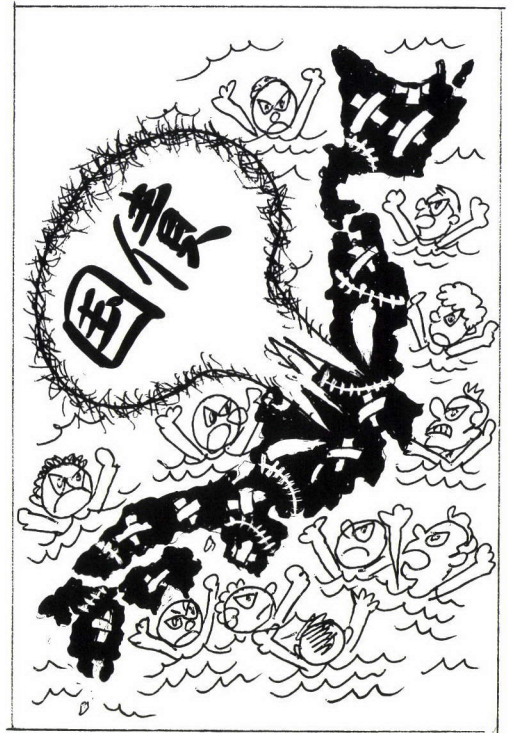
この伝統——土木工事に金を使えば、ともかく目に見えるモノと成って残るから「無駄遣い」ではないのだという思い込み——は、政治家ばかりでなく、国民全体にも、いや大蔵省の役人にも浸透していた。

大蔵省の次の文書ははつきりその事実を表わしている。

「(建設物は) 社会資本という国民共有の資産として残るものであるため、公債も元利払いという形で将来もその費用を負担しても不合理とはいえない」

モノは残る。借金は残っても、子々孫々までそのモノは立派に残るのだから、自分たちばかりでなく子や孫の代にまで負担を負わせても悪くない——ここに表明されているのはまぎれもない「土木建築信仰」である。

こうして鹿やうさぎが出没し、車はめつたに通らないピカピカの4車線道路、岡のてっぺんでほとんど訪れる人もない閑散とした豪華な公民館(この館は人の通る場所以外廊下の電気を消していた)、目と鼻の先に立派な市道があるのにそれに並行して走る県道など、だれのために、何のために作られたのかをいぶかりたくなる道路や施設が「将来もその費用を負担しても不合理とはいえない」という姿勢のもとにつくられつづけ、いまなおそのための国債、公債が発行されつづけている。つい



弘法堂建二

最近、道路公団が本州縦貫の高速道路をすべて予定どおり建設する決定を行なったことは記憶に新しい。

### はじめに歳出ありき

人間が生きていく上で、収入に合わせて支出を決めるのは当然のことである。ところが不思議なことに、この常識が通らないのが国の財政というものであるらしい。

大蔵省は40年も以前から、「健全財政」とか、「財政再建」とか、「赤字国債依存体質からの脱却」など、立派なスローガンを掲げつづけてきた。

こんなことを聞かされると私たちは、「もう借金はしないんだらう」と思い、けっこうなことだと思つ。

ところが、今年度の予算でようやく少し

減少はしたものの、過去一貫して国債は減る気配もなく発行されつづけてきた。大蔵省のいわゆる「健全財政」は、「国債」の発行を前提とする収支の辻褃合わせにほかならない。

かつて「財政法四条」に謳われたあの堅実な「公債又は借入金以外の歳入を財源としなければならぬ」の精神は影もかたちもなく、「おかみ」のなかに、国債という借金に依存して暮らすことを不思議と思わない倒錯した価値観がしみついてしまったとしか思われない。

### 一から出直そう

支出が減らせないから、その分は借金して暮らせればいい。こんな金の使いかたは絶対におかしい。おかしいと思うのが健全な常識というものである。

いつまでもこんなかたちの予算編成をするのはやめてもらいたい。借金まみれで豪華な生活しようなどと思つている日本人はほとんどいないだろう。

私たちがいま知りたいことは、歳入に合わせて歳出を決めるとしたら、私たちの生活はどんなものになるのか、ということである。もちろん貧しくなっても構わない。それがフェアなものであるなら、国民は必ずガマンする。しかし不急不要の公共事業や高額な武器を買うために途方もない金を使いながら、いちばん力のよわい、言葉を出せない人々の税金をじりあげられるようなことはよしともらいたくない。

いま私たちのすべきことは、無限の消費に向かって歩を進めるのではなく、自然を破壊せず、互いに助け合つて節度ある幸福な生活を営むために、消費と分配のバランスをいかに決めるかということである。

そのためにももう、国債依存のごまかしはやめてもらいたい。「豊かな生活」が必ずしも人間の真の幸福につながるものではないことを、日本人の多くは感じている。「ホリエモン」的幸福感はむなしなもの、多くの人々は感じている。日本の庶民は、政治家や官僚が考えているより、はるかに高級な人々なのである。

(のもとみきこ・フリーランスライター)



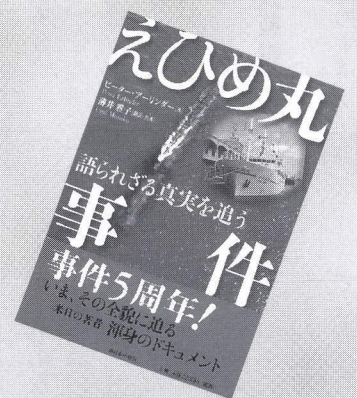
# 読むBOOK



ピーター・アーリンダー著  
薄井雅子翻訳・共著

## えひめ丸事件

北 健一



新日本出版社  
(本体価格2200円+税)

ごく稀に、まるで「灰の中のダイヤモンド」のように、本の洪水のなかにキラリと光るものがある。切実なテーマと出会った著者が、書かずにはいられなかった作品だ。本書、『えひめ丸事件』もそんな熱い一冊である。

うセレモニーだけで軍法会議を開かず、業務上過失致死などの責任を誰一人問わぬまま、幕引きを急いだ。そして日本の外務省と愛媛県は、真実を隠す片棒を担いだ。

著者のピーター・アーリンダーは、ロースクール教授も務めるアメリカの著名な人権派弁護士だ。日本に司法改革の研究のために来日していた2001年、彼はえひめ丸事件と出会う。

及ぶ1次資料と、彼自身が、真相究明を強く願った寺田真澄(亡くなった高校生・祐介君の母)ら2遺族が委任したえひめ丸被害者弁護団に協力した経験だった。その手堅い実証性は、英米ノンフィクションの系譜のうちにある。

可能性があった以上、同じ弁護士が県と家族を同時に代理すべきではなかった」という。ちなみに、こうした愛媛県側の問題は、本誌50号でも取り上げられた愛媛県議・阿部悦子と共産党の2県議の質問によって明らかにされた。

的だが、日本にはそのままではまらないような気がする。そうしたカルチャーギャップも感じるものの、本書は総じて私たち日本人読者にも非常にわかりやすく仕上がっている。それは何よりも、アーリンダーの妻で新聞記者経験をもつ薄井雅子の力だろう。

私は「週刊朝日」(06年2月17日号)に書いた検証記事でふれたが、外務省に情報公開請求したえひめ丸事故対策の記録は墨塗りだらけだった。墨塗りの下に何があるのか。日米の権力者たちがひた隠した真実に迫るアーリンダーらの筆致はミステリーさながらで、事故直後から取材を続けてきた私も目からウロコが落ちる思いで一気に読んだ。

問題は多岐にわたるが、「米海軍が軍法会議をなぜ開かなかったのか」の分析は、弁護士ならではのものだ。また「えひめ丸の船主である愛媛県と被害家族との利益は相反するの

に、愛媛県が委任した弁護団に大半の家族を相乗りさせたのはおかしい」という論点も興味深い。

「彼女が本書の終わりに「本書は真相究明の始発点だ」と記している。今から何ができるのか? 関係者をかえって傷つけないか? 迷いながらも、遺族の深い悲しみにふれ「事件の闇」を垣間見てしまった取材者の端くれとして、薄井の覚悟に共鳴せずにはいられない。

乗船実習のためにハワイ沖を航行中だった愛媛県立宇和島水産高校の実習船えひめ丸が、米海軍の原子力潜水艦グリーンビルに衝突、沈没させられ、高校生ら9人の命が奪われた惨劇だ。

遺族も、辛うじて助かった乗員やその家族も、米海軍に事故原因の究明を求めた。ところが米海軍は査問会議とい

えひめ丸には、年1億円のマグロ水揚げノルマが課せられ、船体も、生徒の部屋を船底に追いやるなど命と安全より漁獲を優先していた。ここからアーリンダーは、「被害家族が愛媛県の責任を追及する

「正しい情報が伝われば市民は正しい行動をする」というアーリンダーの考えは魅力的だが、日本にはそのままではまらないような気がする。そうしたカルチャーギャップも感じるものの、本書は総じて私たち日本人読者にも非常にわかりやすく仕上がっている。それは何よりも、アーリンダーの妻で新聞記者経験をもつ薄井雅子の力だろう。

惨劇を二度と繰り返させないために。心ある本書読者として、一度始発点に立ちってみた。『えひめ丸事件 語られざる真実を追う』(2200円+税)(きたけんいち・ジャーナリスト)

乗員やその家族も、米海軍に事故原因の究明を求めた。ところが米海軍は査問会議とい

の報告書と資料、愛媛県議会の議事録など段ボール5箱に

米海軍の査問会議や米国国家運輸安全委員会(NTSB)の報告書と資料、愛媛県議会の議事録など段ボール5箱に

米海軍の査問会議や米国国家運輸安全委員会(NTSB)の報告書と資料、愛媛県議会の議事録など段ボール5箱に

米海軍の査問会議や米国国家運輸安全委員会(NTSB)の報告書と資料、愛媛県議会の議事録など段ボール5箱に

1970年代初頭、日本に生まれた「ウーマン・リブ」。田中美津は、その紛れもない元祖「最初の人」である。

あれから30余年が過ぎて、ウーマン・リブという言葉さえ過去のものとなった。いま、田中美津がめざしたものを改めて検証してみたい。彼女たちのあのパワーはどこから生まれ、何をめざしたのか。田中美津にとって、ウーマン・リブとは何だったのか。

## 富山敬子

# ここ30年の女たち

# ウーマン・リブとは 自分を生きること

## 田中美津は語る



癒されたい患者たち

現在、田中美津は隅田川近くのマンションの一角で鍼灸師として暮らしている。治療をはじめ22年。一度も看板は出してない。しかし予約はつねに3か月先まで埋まっている。

ベッド2台の小さな治療院。ひとりに2時間はかける丁寧な治療。しかし病気をくった自分のものの考え、感じ方や生活の仕方はそのま

スタートラインからすでに暗雲をまとっていた。就学前の幼女のころ、実家で働いていた男から、チャイルド・セクシュアル・アビューズ（幼児への性的虐待）を受けていたからである。処女性が女の価値であった当時、彼女は絶えず「他の娘はまだ正札さえ付けていないのに、私はすでにデイスカウト台に乗っている」という意識にさいなまれていたという。

もうひとつ、19歳のときの不幸。最初の男とのセック

70年の安保闘争が、ベトナム反戦とともに、学生だけでなく、市民も巻き込んでこの国をゆすぶったとき、彼女は偶然、ベトナム戦災孤児のことを耳にする。そして「かわいそうな子どもを救いたい」の一心で、「ベトナム戦災孤児に愛の手を」と新聞に投稿した。

たった一人の無名の女の呼びかけに応じて、約80人が集まった。生まれて初めて人前じゃべった。何をしゃべったのか記憶にない。

しかしなぜ、ベトナムの孤児だったのか？ 戦争によって父親が殺される。「隣の子は父ちゃんがいるのに、どうして僕には父ちゃんがないんだ！」と泣いている子ども。彼女は「痛み」を「痛み」と感じた。

まで、病気だけ治してもらおうとする人に対して、美津は決して優しくない。「あなたしか担えない部分は、あなたがしっかり担ってよ。」私治す人あなた勝手にやる人「じゃ虫がよすぎる」そう叱る。

それというのも他力本願の者たちに、かつて「白馬の王子さま」の訪れを夢みていた自分の姿を重ねあわせてしま

スで梅毒に感染したのだ。完治までの2年間、だれに相談することもなく病院に通いつづけた孤独の深さはどれほどであったろう。

しかし、このふたつの凄まじい体験は、田中美津に「自分の人生は自分で引き受ける」という性根を与えた。

### ベトナム反戦

しかし彼女のその「夢」は、

20代の半ば。

でもあったのだ。

こうして「ベトナム戦災孤児に寄せる市民の心の会」を発足させ、その活動にのめりこんでいったが、やがてアメリカのベトナム侵略が戦災孤児を生んでいるという事実

行つたときのこと。彼女は突然マイクを持たされ、何かしゃべるように促された。しかし動転するだけで何もしゃべれなかった。

デモ行進をし、無我夢中の日々が1年過ぎた。

の……。そこから得たものは、握つたとたん色褪せた。女を演じて男たちにチャホヤされても、すぐに退屈が忍び寄る。男たちの求める女を演じつづけてへどこにもいない女」になるより、ぶざまだけれど、へここに在る女」としての「あたし」を生きる。「あたし」がよしと思う生き方を求める。それしかない。それがもの狂おしい試行錯誤のうえに、たどりついた答えだった。

1969年、全共闘運動の終焉ともいえる東大安田講堂の陥落。その後、学生運動は急速に鎮静化していく。「われわれはア」と叫んでいた学生たちは、就職したり、結婚したり、何事もなかったかのように一人、また一人と消えていった。

結婚には向いていない。王子さまなんていない。どうあがいても、可愛い女の子にはなれない。自分が悪いことをしたわけではないのに、心に重い荷物を背負わされて生きてきた。善人なおもて往生する。い

しかしいまだ、彼女は自分が何者なのかもわかっていなかった。どこにも収まりきれない自分がいた。

わんや悪人おやであるのなら、頭に落ちてきた石の落とし前はしっかりとつけよう。その落とし前は、結婚することでも、キャリアウーマンとして成功することでもなかった。その程度の自分では癒されない。どうしたら、落とし前をつけることができるのか。

運動をしているときから感じていた違和感。学生は疑問を持たずに「われわれはア」と叫ぶ。しかし彼女はいつもその「われわれ」からもれて

も、すぐに退屈が忍び寄る。男たちの求める女を演じつづけてへどこにもいない女」になるより、ぶざまだけれど、へここに在る女」としての「あたし」を生きる。「あたし」がよしと思う生き方を求める。それしかない。それがもの狂おしい試行錯誤のうえに、たどりついた答えだった。

いる、どこにも属さない自分、燃焼していない自分を感じつづけていた。

か。そう思ったとき美津は「自分自身のウーマン・リブ」に出会った。

### 自分の言葉がない

山谷で働く労働者の支援に

若いときの彼女は女性週刊誌に男にもてる方法が載っていたら、田中美津は、たぶんどこかにうまく収まっていたに違いない。

### ライオンの出陣

偶然出会った、W・ライヒの著書『性と文化の革命』が

### 便所からの解放

何かに突き動かされたように、彼女は「便所からの解放」のビラを一晚で書き上げる。

美津に光をもたらした。27歳。

そこには、「人間の性に対する意識は、人間存在の核心である。性を嫌悪したり、禁欲をよしとする文化が、自分たちから生き生きとしたエネルギーを奪い、支配されやすい従順な人間を生み出している」と。そして女を妻と娼婦に二分することで続てきた一夫一妻制度、これこそが性否定文化の中心だと説かれていた。

便所とは男の性欲処理機のこと。当時、学生運動用語に「公衆便所」というのがあった。それは慰安婦を表わす戦時中の軍隊用語であった。

それまで美津は、幼児期の体験から「自分だけディスカウント台に並べられている」という物語を自分に課し、長い間うつ屈して生きてきた。

「便所からの解放」はまさに、男の都合のいい女からの解放宣言だった。男に絶望した女たちの、この解放の叫びこそが、リブの原点であった。

### リブ運動の幕開け

田中美津の手書きのガリ版刷りのビラは、公園やデモ、集会で配られた。女たちは、ひたたくるように受け取り、ピンピンと反応した。

美津はあのとき、確かに時代を掴んだのである。ビラは叫んでいた。

男にとって女とは、「母性のやさしさ」母か、性欲処理

機「便所か」のどちらかである。男は女をこの二面に抽象化し分割する。そして、母性の面を結婚相手の女に当てはめ、便所の面を遊びの女に当てはめる。

彼女と同じように居場所のない、運動のなかで燃焼できなかった女たちが集まった。

中心メンバー10人で「ぐるうぶ・闘うおんな」を発足。1970年10月21日の国際反戦デーの夜、50人のヘルメット姿の女たちが、「ぐるうぶ・闘うおんな」の呼びかけで銀座を練り歩いた。日本初のウーマン・リブのデモであった。

当夜、マスコミがのしかかるように押しつけてきた。カメラに囲まれて縮こまる参加者たち。美津は女たちに語りかけた。

「女はつねに男から見られ、命令され、価値付けられる存在として生きてきました。新しく生き直そうと集まった、この記念すべき日をまたもや男たちのカメラという眼差しで踏みじられるに任せていいのでしょうか。マスコミは女たちから離れなさい。私たちはカメラを拒否します」

「そうだっ！」縮こまっていた女たちは、マスコミを力で押し戻した。

しかし、翌日新聞には「やりますよ。おんな解放ウーマン・リブ銀座に 反戦デー 男は縮出せ 機動隊もタジタジ」と面白半分書き立てられた。

このようにマスコミのリブ報道は、必ずと言っていいほど、偏見や中傷に満ちていた。

1971年8月、リブ合宿が長野で開かれる。全国から集まった約300人の女たちは、せき止められていた水が一気に流れるように、寝る間も惜しんで語り合った。このマグマのような2泊3日から戻った女たちが、各地にたくさんリブグループを誕生させた。そして第1回リブ大会が1972年東京・渋谷の山手教会で開かれ、そのときに集まった資金で、リブ新宿センターができる。通称「リブセン」の誕生である。

### リブ活動

初めての銀座でのデモ以降、新聞各社の紙面にはウーマン・リブの記事がしだいに増えていく。その年の末には「ウーマン・リブ」という名称はトレンド化した。

女たちは集まって日ごろ職場や家庭で感じている違和感や怒りを伝え合ったり、ピラをつくったり、デモや集会を開いた。出入国管理法、優生保護法、人工妊娠中絶、子殺しなど、活動は多岐にわたった。美津が属していた「ぐるうぶ・闘うおんな」の資料にはこう書いてある。

ウーマン・リブ（女性解放運動）とは、自分の、女の「生きる」を真剣に問い詰める女の運動。女の闘い。一略一女であること。人間であることを、ごまかさずに見つめてゆきたい女の集まり、それが「ぐるうぶ・闘うおんな」です。

(1970年11月3日)

リブ運動は、自分を自分の言葉で語ること。そうすることで自分をとり戻し、解放することからはじまる。それをもっとも重要視する運動だった。

「選ばれた女」でもなく、「選ばれない女」でもなく、女が「ここにいて女」として、自分自身を生きていくために。

### メキシコへ

しかし、女たちの熱さに反比例して、美津の体はだんだんと悲鳴をあげるようになっていった。

来る日も来る日もデモにピ

ラ撒き、抗議集会に裁判傍聴。仲間と夜中まで討論、そのまま眠るといふ不規則な生活を続けていくうちに、持病の慢性腎炎が悪化したのだ。

毎朝、みかん色の尿が出る。もう体はポロポロ。しかし、運動から離れられない。このまま日本にいては死んでしまう。

あぐらをかこうと大股で歩こうと、私は女だ。「女であること」はどうやら選ぶ直すことができた。しかし「日本人であること」はどうなのだろうか。

意見を言うより微笑んでいるほうが、好感をもたれる日本という国。「日本人であること」を自分に選び直さずに「女であること」を選び直すことはほんとうにはできないのではないか。であるなら、日本の外から「日本人であること」を考えてみよう。

1975年。メキシコで国連が第1回世界女性会議を開催するのを機に、美津は日本を離れる。

### 鍼灸師へ

メキシコで美津は、未婚の母となった。夫も知人もお金も地位もない。子どもを抱えた、ただの日本の女。日本のなかでの孤独と、海外の階級

社会のなかでのそれは全く違う。この孤独を力にしようと美津は思った。そしてまた、子どもを育てながら、「生きる」という現実問題に直面し、弱い体を真剣に治そうとも思った。

鍼は、小さいころから家に鍼灸師が来ていて身近なものであった。メキシコに渡って4年半後、鍼灸師の資格取得のため、日本に帰る。

それから今日まで22年間、鍼灸ひとすじ。ファンは嫌い、と美津は言う。患者とも依存関係はつくらない、と。

「私が病気を治すわけじゃないもの。自分で治りたいと思わないかぎり治らないのが病気です」。

「だれかが幸せにしてくれるわけじゃない。自分の人生を自分で引き受ける。そのためにはからだを良くしないとね」患者に口癖のようにそう言っていると、田中美津は笑う。彼女はいまも決してウーマン・リブを手放してはいない。

肉体化された思想、それが田中美津のウーマン・リブである。(とみやまけいこ・フリーランスライター)



チラシを撒き、雑誌を発行し、ニュースレターを配り、グループをつくり…さまざまなリブのグループが、多彩な運動を繰り広げた

◆「原始、女性は太陽であった」と書いた平塚雷鳥は、「婚姻制度」の否定という一点で、もっともラディカルな「ウーマン・リブ」の名に値する。

あれから60年、彼女の衣鉢を継ぐ女性たちが現われた。田中美津をはじめとする「ウーマン・リブ」の人々である。

彼女たちは、それが平塚雷鳥の衣鉢を継ぐものなどとはまったく思っていなかったに違いない。それは60年代後半の男性主導の全共闘運動が生み出した鬼つ子だった。

しかし一夫一婦の婚姻制度を軸とする男と女の関係が、男による女の抑圧の形式になり果てている現実を直感した田中美津の鋭さはすばらしい。彼女たちの機関誌「女・エロス」は広く読まれ、タイムルの斬新さとともに読者の心を引きつけた。

しかし「制度」というものを否定するウーマン・リブは、多くの女性たちにとって近づきにくいものだった。

◆75年の国際婦人年をきっかけに現われた女性運動は、先鋭的な「ウーマン・リブ」よりはるかに穏健な、しかし広汎なかたちで広がっている。

さまざまな女性たちが、ユ

ニークなかたちで運動を展開していった。最初その拠点となったのは市川房枝の「婦人有権者同盟」であり、田中寿美子らのつくった「婦人問題懇話会」であり、「労働省婦人少年局」にたむろする女性たちであった。

◆70年代からの女性運動は、一見過激な「ウーマン・リブ」でなくとも、そのなかに男と女の関係を問う直す視点をふくんでいた。その意味ではやはりそれは「ウーマン・リブ」の一環であったのだ。

さまざまな運動と女性たちが現われては消え、消えては現われたが、そのなかでもっとも息ながくつづいた運動のいくつかをあげてみよう。

樋口恵子、俵萌子、吉武輝子のような昭和一ケタうまれの人々がはじめた「国際婦人年をきっかけに行動を起こす女たちの会」。半田たつ子の「家庭科の男女共修の会」。

機関誌「あごら」の発行でながく気を吐いた斉藤千代、フェミニズムの最後衛と自称する投稿誌「わいふ」の田中喜美子。

そして若い読者にもっとも強いインパクトを与えた単行本「魔女の論理」の著者駒尺喜美。彼女はいまついの住みかとしての女たちの共同生活

の場をいかにつくるかに取り組んでいる。樋口恵子もまた、「高齢社会をよくする女性の会」で女たちの老いの問題に取り組んでいる。

従軍慰安婦の問題に全エネルギーを費やして燃えつきた松井やより、もっぱら天皇制問題を中心に発言をつづける加納実紀代……。

子どもあずけあいの組織「あんふあんで」をつくった幾代昌子。優生保護法の改悪を阻止しようと運動をつづけた芦野由利子たち、アフリカ女性の「割礼」問題に取り組むヤンソン柳沢由実子……あげれば切りがなく、いかに多くの女たちが女性のために力を尽くしているかに改めて驚く。

◆しかしいま、時代は大きく変動しつつある。女性たちは（少なくとも都会では）「解放」され、「豊かさ」に慣れた彼女たちの間には一種の頹廃現象まではびこっている。

専業主婦は生きがいの子どもにかけて「生きる力」の乏しい子を育て、働く女性は生活の負担に喘いでいる。

女たちはいまや「虐げられて」はいない。しかしほんとうにバランスのとれた、「幸福」な生活をしているといえるだろうか。

(N)

# 女たちは「解放」されたのが

嵯峨久美子

樋口恵子さんはその運動歴の長さといい、「高齢社会をよくする女たちの会」を中心とする充実した活動といい、メディアでの発言率の多さといい、政府関係の審議会などでの活躍といい、女性の視点から発言をつづける評論家の第一人者である。

その彼女に、過去ほぼ30年の女たちの変化について語ってもらった。時代は激動期を迎えている。解放された？女たちは、いまだどこへ向かって歩みだそうとしているのか。

●かつて妻たちは  
つつましかった

昭和35年ごろ樋口さんは、夫の転勤先の小都市に住む社宅妻であった。

あるとき、1人ずつ子どもを抱えた妻たち3人で、町のデパートへ買い物に行った。

「お昼どきだったから、蕎麦屋に入ったの。ただの蕎麦屋よ。私は何とも思わなかったのね、たまに外でお昼食べること。夫たちは大企業の社員でお金に困っているわけではなかった。

ところが、さあ食べましょう、となったらね、他のふたりがいうの。『まあ、お父さんの留守に買い物に来て、おまけにお蕎麦屋さんなんかに入ってお蕎麦を食べて、申し訳ない』って。

あのころはそういう時代だったんですよ」

今や青山あたりではコマダムたちがしゃれたレストランで2500円のランチを食べている。夫は会社の近くで6500円のランチなどを食べているだろうに……。彼女たちのなかに「夫に申し訳ない」と思う妻がいるだろうか？

●男も変わった

例えば子どものオムツ。樋口さんの世代では、赤ん坊のオムツを替える夫はほとんどいなかった。

「子どもを可愛がる父親はいっぱいいいだし、お風呂に入れるところまでやる人もけっこういたけれど、泣き出したりすると、『ほらほら、お母さん』って押しつける。

そしてオムツ替えるのは絶対お母さんだった。わが家も原則そうでした。たとえ共働きしていても、『夫にオムツまで替えさせるなんて』と、非難する女性が多かった。『ご主人がかわいそう』とか『そこまでやらせなくても』とかね」

樋口さんは最近、タクシーの運転手からこんな話を聞かされた

ことがある。

3人の子持ち、みな男の子。子どもは可愛かったけれど、オムツを替えたことはなかったという。ところが息子たちが結婚して、赤ん坊づれで遊びにくると、オムツを替えるのは息子のほう。

「彼はついで、息子に『おまえ、そんなこともするのか』と言ってしまったんですって。そうしたらお嫁さんに『お義父さん、子育ては2人でするものですよ』って説教されちゃって。あとで妻に物陰にひっぱついていかれて、『余計なことを言うもんじゃない』ってつねられた。『しかし驚いたねえ先生。一代で変わったよ。先生の勝ちだよ』って言われた。

こうした面はほんとうに変わりましたよ。

ある時期の男たちは、自分も辛い思いをして働いていたから、妻が苦勞に耐えて辛抱している姿で癒されていたのかもしれない。

『妻の自由は夫の不満』なわけ。妻が家事・育児に関わりたくないところ、好きなことをしていたり、夢中になるものを持っていたりすると、それだけで腹を立てる夫が少なくなかった。

私はそういう人にはずいぶん憎まれたし、今も男性の一部に憎まれていると思いますよ。

だけど、この部分、女はほんとうに変わった！ ヨン様追っかけて旅行する中年の奥さん、見てごらんさい。でもあの妻たちのかげには、夫がいる。ですからね、何のかのといったって、男もすごく変わった。私はそう思う」

### ● 社会へ出たい妻 出られない妻

昭和50年ごろ、樋口さんはある会館で連続講座を引き受けていた。受講者は20人ほど。

そのなかの1人で、いつも1歳半くらいの子どもを抱いてきていた20代の奥さんが「私、来られるのはここまで。来年はもう来られないですね」と言った。

「彼女の夫は企業のサラリーマンで、昭和10年前後の生まれだと思ふの。その夫が、買い物は仕方ないけれど、主婦は出歩くものではないって言うんですって。勉強もね、主婦として必要なものなら行ってもいいけれど、それだつて家事に支障のない範囲ですべきだ」と。

『私の本棚も家事や栄養の本と並んで、消費者問題の本があるところまでは大丈夫なんです。だけど、婦人問題の本があったら、もう夫は許してくれません』

それに子どもが来年は口がきけるようになるので、『ママとお勉強に行ってきた』とか『男女平等って言った』とか話せるようになる。そしたら夫はもう出してくれないって。いまだに世の主婦はそうなのだと、シヨックでした」

### ● 人として当たり前前の願い

戦後、主婦が家族の食べ物を集めてくるのに必死だった時代は昭和25〜26年ごろまでつづいた。

「そういう時代が過ぎて、物理的な諸条件が整ってくれば、女が自分の人生をもっと充実させるために、外へ出たい・勉強に行きたい・子育てのグループをつくりたいなど社会的活動をしたいたいと思うのは、人間にとつて当たり前の願いだと思ふのね。

たとえば『PTAで初めて外に出られました』なんていう人もいる。そのPTA活動ですらブツブツ言う夫がいる。

PTAの役員を引き受けても、男なら『俺は今度、PTA会長だぞっ』ですむのに、女はクラス委員を引き受けるのでさえ家に帰ってダンナにいうと、『俺に断らず

に何で引き受けてきた！』って怒られるわけ。

私はそういう人に言いました。じゃ、今度夫が帰ってきてね、『俺、課長になったぞ』って言ったら、あなたも言った方がいい、『誰にことわって課長になったの！』って」

夫に遠慮して自分のやりたいこともせず、読みたい本も読まず、家を外にして出歩かず、家事・育児にだけ縛られている妻。

かつて夫は妻がそうした「女中」役に閉じこもっていさえすれば機嫌がよかった。

現代の妻たちには想像を絶するこうした状況は、少なくとも70年代にはまだまだ残っていた。

しかし時代の変化は気が遠くなるほど速い。いまほとんどの妻は、少なくとも夫の留守中には「自由」を享受している。そしてその背後に、女性解放のために努力した多くの女性たちがいたことを思い出すこともない。

樋口さんはその時代を生きた、いまや数少ない証言者の一人である。

### ● 戦後始まった

#### 「女性解放」の流れ

戦後の「女性解放」は、占領軍のインシアティブのもとにはじまった。戦前から市川房枝らが要求しつづけた「婦人参政権」は、

占領軍によってタナボタ式に与えられ、労働省には「婦人少年局」がつくられ、戦時中マルクス主義者として迫害されていた山川菊栄が局長に就任した。

その後、アカ狩りに転じた占領政策の転換で、山川菊栄は婦人少年局を追われ、後任には、より穏健な藤田たきが就いた。

しかしさまざまな経緯があるにせよ、この組織から多くの女性の俊才が巣立ったのであった。

「当時は『男女平等』という言葉は政府内部でも大きい声で言えなかったようです。女性が強くなるのが大きらいな男たちが多くて、婦人少年局自身をつぶすという動きもあったのです。

私はこの当時の動きに直接かかわっていませんが、そのとき地域婦人連合会や婦人有権者同盟、労組の婦人部などの女たちが結束して運動して食い止めた。えらい先輩たちですよ。

ともかく『男女平等』の思想は『左翼』だと思われていた。やっこの言葉が中立的普遍性をもって語られるようになったのは、やはり国際婦人年のおかげ。

あれは女性にとつて一種の「神風」だったと私は思ってます」

### ● 「婦人問題懇話会」の重み

さて高度経済成長へのプレリユードが響きはじめた1962年、「婦人懇話会」の略称で知られる

「婦人問題懇話会」が発足した（現在は「日本婦人問題懇話会」と改称している）。

それは田中寿美子とともに、働き盛りの女性メンバーが核となつてつくられた婦人問題（現在は「女性」という言葉になつているが、あえてこの言葉を使う）の研究・交流の場であつた。当時は、生活防衛の組織として知られる「主婦連」「地婦連」などはあつたが、いわばフェミニズムの視点を含むこうした研究会は、ほとんど存在していなかつた。

労働省婦人少年局のメンバーが中心となつていたため、会員には女性官僚が多かつた。赤松良子さんも当時から会員の一人である。

樋口さんは新聞で会の発足を知つて入会する。

「私は、この『婦人問題』機関誌に、『内助の夫の家庭像』という論文を出しました。これは共働きが永続している家庭において夫と妻の役割分担がどんな風になつているか、今でいうと男女共同参画型になつているかを20件くらい分析したのです。これが私のデビュー作です。

『婦人問題』で書いたそれらの論文がいろいろな人の目に留まつて、『NHKで話して』とか『別の題材で婦人公論に書いて』とか、どんどん頼まれるようになったのね。

あのころホントに忙しかつた。

NHKで朝の番組に出て9時半に終わると、10時にはもうテレビ朝日に移動したりして……。そうやってテレビ局を走り回り、女の生き方をめぐる本を書き、講演にもよく出かけました。

講演先は主に自治体の社会教育関係の講座。当時は婦人学級



で、『主婦の生き方』や『主婦の生き甲斐』などのテーマが何年もつづいた時期でしたね」

### ●活動の場が広がる

1975年1月、樋口さんは依藤子、吉武輝子さんなどとともに「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」の設立を呼びかけた。

「私はね、田中寿美子先生からすすめられてはじめてだけ。『市川房枝先生ともお話ししたんだけど、アメリカにはナウ(NOW:National Organization of Women・婦人のための全国組織)という団体があつて、いわゆるウ

ーマン・リブだけではなくて法律改正も含めてやっていく体制内の現実的運動がある。日本にも必要だから、樋口さんの世代が中心になつてみなさんでなさつたらどうですか?』と言われたのがはじまりだった」

その前年、半田たつ子さんを中心に「家庭科の男女共修をすすめる会」が結成され、樋口さんも参加し世論を動かすはじめてだった。

こうしたなかで、「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」は、つぎつぎと世間の目をひく運動を起こし、男女のあり方の新しい理念を拡げていく。

こうした女たちの思いや活動の波がうねりとなって、その10年後の1985年、「国籍法の改正」「男女雇用機会均等法(以下、均等法)の制定」「家庭科の男女共修化」へとつながつていった。そしてこの3つのテーマを克服したことで、日本は「女子差別撤廃条約」を批准することができたのである。

「私はこの3つのなかでは家庭科の男女共修には力をいれませんでした。外側の男女平等がいくらできても、内側である家庭や地域での性別役割分業の意識がなくならない限り、女が1・5倍の労働を背負い込むだけで、ほんとうの平等にはならない、という問題は大きいですからね」

テレビで流行したハウス食品のCM、「わたしつくる人、ほく食べる人」は、性別役割分担の最たるものであつたから、「行動する会」が取り上げて、一大センセーションをまきおこしたのだつた。

しかしこうした運動も、「国際婦人年」という助けがなければまづはできなかったらうと樋口さんは断言する。

### ●女は幸せになつたのか

樋口さんたちの世代が大学へ入るころは、「女子大なら」あるいは「文学や家政学なら行かせてやる」と言われながら大学に進んだ女性も多かつた。

ところが今の若い人たちは、ほとんどが志望どおりの大学や大学院に進めるようになった。均等法のおかげで、成績さえ良ければかつては女ということだけで入れなかつた大企業や研究所にも次々と就職している。

「男性と肩を並べて就業している今の女性の姿は、あのころからすると夢のよう。文字どおり隔世の感です。

けれども、女が子どもを育てながら仕事を続けようとする、朝早く起きて子どもを保育所にあずけて会社へ向かう。夜はいくら保育時間が長くなつたとはいへ、保育所の閉まる7時8時に間に合



うように、急いで夕食の買い物を買って、すませて子どもを迎えに行く。家に帰るともう、9時10時。子どもとゆつくり話す暇もなく風呂に入れて寝かしつけ、洗濯機をまわしはじめるという毎日ですよ。

統計的に見ても家事・育児は妻の側。仕事は男並みに働いて、35歳だというのに、ぐっと老け込んでしまっている女性たちの姿を見ると、これが私たちの求めたものだろうか、考え込んでしまうの」

### ●真のワークライフバランスを目指して

樋口さんはかつて、強烈な疑問を感じたことがある。

昭和43年、暮しの手帖の「世界はあなたのためにはない」というエッセイを読んだときだ。

それは、編集部員の林澄子さんの急逝を悼み、花森安治が書いたものだった。樋口さんは林さんと同年代。再就職をして勤めにも出ていたし、同じ年ごろの子どもを持っていたので、他人事とは思えなかったという。

「花森さんのことを私は今も尊敬しているけれど、その文を読んだときは、『やっぱり男だなあ』って思いましたね。結局彼女を讚めたたえていただけなのよ。

彼女は完璧な職業人であり、完璧な妻であり母でもあった。職

場ではいつも残業し一番の働き者であったが、家へ帰れば、自分より帰りの遅い夫のために温かいスープとご飯を用意していた……。

33歳で脳出血で死ぬなんて、当たり前なことではない。職場でも家庭でも一番の働き者では過労になるのが当たり前———と思っただけ、よく覚えています。

その当時は共働きの女性はいく少なかったし、林さん個人の問題だったけれど、今は日本中の働く女性たちが家の外側と内側の両方で、完璧に働くことを求められて息切れしている。

でもようやく私たちの意識も変わってきて、自分たちも家庭に関わりたいたいというようにはなってきています。

まだ女の労働の場の確保のためには、『長時間労働に女も合わせる』というかたちでしか開かれていない現実がありますが、少子化がそれに響きふりをかけはじめた。

今度は切り札を職場の側に移して、言葉だけは経営者の間に普及しはじめた『ワークライフバランス』を、確実なものにしていくことがいま求められているのです。

とてつもなく大きくて重いものが、私たちの目の前に横たわっている。しかし日本社会の生活と仕事、ひいては女性と男性とのバランスこそ未来をひらく道です。それが、いまの私の実感ですね」

(さがくみこ・フリーランスライター)

## 「欲望充足」が「幸福」への道？

◆ここ30年、日本女性にもっとも大きな影響を及ぼした人物は「林真理子」だ、という人がいた。

それは彼女が女性の「欲望充足」を中心的な価値としているからだという。それまで影の部分にかくされていた物欲、性欲、出世欲、虚栄心等々を白日のもとにさらけ出しただけでなく、それらに公民権を与え、「欲望追求」に対する肯定感を与えたからだという。

この分析は正しい。文壇にデビューしてしばらく後、「聞いて聞いて、私の貯金通帳の残高がついに2000万円を越したのよ！」とこの人が書いているのを見て度肝を抜かれたが、その後の彼女の生の軌跡はまさに、女性として「持たねばならぬ」ものはすべて手にいれるという断固たる決意によって貫かれている。

金銭はもとより、身にまとうものをはじめとするあらゆる贅沢、世間並みの夫そして子ども、美容整形でランクアップさせた容姿——すべてを手にいれるまであきらめない執念と、それを實現してしまふ才力に恵まれているのがこの人であった。

その彼女の描く女性像が、男性作家の描いた女性よりはるかに生き生きしていることは当然のことといえる。これまで隠されていた女性のえげつないホンネを描き出しているからだ。

◆彼女の根底にある価値観は、いまや日本女性にじわじわと浸透しつつある。

物質的豊かさや虚栄とを人生の中心とする価値観。しかも彼女の最大の特徴は、「ホリエモン」と同じく、それらすべてに対して「恥じ」の感覚を持たないということにある。

日本は物質的価値観の男性的象徴として「ホリエモン」を、女性では「林真理子」を生み出した。日本はどこへ行くのか。(K)

# 国分寺市民は立派だ！

山口遼子

昨年、文部科学省は「人権教育のための調査研究事業」を各都道府県教育委員会に委託した。この事業は市区町村教委に再委託されたので、国分寺市でも市民と市職員が共同して準備委員会を立ち上げた。市民の話では、準備委員会は連続講座を企画し、その第一回目の講師に東大教授（社会学）の上野千鶴子さんと決めたという。

昨年、東京都国分寺市が企画した講演会の講師として東京大学教授上野千鶴子さんが予定されたが、なんと都の意向で中止になった。その背後に何があったのか。大体の経過は次のとおりである。

上野さんはどのように感じられましたか？

上野 私はずっと国分寺市民が立派だったと思いましたね。

国分寺市は都との共催は止めて市独自で実施しないかという代替案を出したのですが、市民はノーと言いました。田中 ふつうはそうしないのですか？

上野 だいたいこういう場合は3つの対処法があるので

- (1) 講師の首をすげ替える。
- (2) 自主事業にする（この場合は都と共催にしない）。
- (3) 公の看板を下ろして民間というにし、裏から金を出す。

というやり方です。これだと表ざたにはならず何事もなく済んでしまいます。国分寺市民は穏便に済ませず、筋を通したんですね。なかなかいいことですよ。

国分寺市の事業計画が変更させられた裏には、石原慎太郎都知事が「ジェンダー・フリー」に対して激しい嫌悪感を持つことを忖度した都の職員の「配慮」があったようだ。

の学問を排除しようとの動きは、重大な憲法違反にもつながると考える人もいた。

上野 主催者側のテーマは「人権」でしたから、私はそれのつとった話をするつもりでした。しかし都は「上野は女性学の権威で、ジェンダー・フリーという用語を使う可能性がある。だからNO」だといったのです。私は研究者の立場としてジェンダー・フリーという言葉は使わないことにしていますし、テーマはあくまでも「人権」でしたから、全く筋違いな話でした。

田中 それで抗議なさったのですか？

上野 若桑みどりさん（川村学園女子大教授）などが中心になって、インターネット上にあるジェンダー関係の研究者と活動家からなるメーリングリストをフル活用して「東京都に抗議する！」というアクションを起こし、抗議文を出しました。これに対する賛同の署名は、1週間足らずで1808筆も集まったのですよ。さらにホームページを開設して、なぜ都は上野の講演を中止させたのか問いただした公開質問状やメディア報道などの関連資料を公開しました。

上野さん側が督促状まで出して引き出したのが、以下の解答文である。

ここまでは順調に進んだのだが、講師が上野氏であることを知った都教委から、講師を変更するようにと横やりが入った。市民らは自主的に決めたのだから変更はしたくないことを市に伝えたが、都は認めず、結局国分寺市は委託事業を「自主的に辞退する」形をとらされたのだという。

なぜこんなことが起きたのか

田中 この経過、全体とし

国分寺の市民は、市の意向によって自ら「人権」について自主的に学が企画を立てたのに、それを撤回に追い込まれた結果となった。また特定

上野さん側が督促状まで出して引き出したのが、以下の解答文である。



船倉 正実

東京都教育庁生涯教育スポーツ部教育課長

「公開質問状について  
平成十八年一月十三日付で知事、教育委員長、教育長及び社会教育課長宛の公開質問状をいただきましたが、本件に  
関する事実経過は下記のとおりです。」

記

本事業は、東京都教育委員会の事業として国分寺市教育委員会に委託し、実施を計画していたものであり、東京都教育委員会は、同市が企画中の内容が「ジェンダー・フリー」という用語の使用に関する東京教育委員会の見解」を踏まえたものであるかどうかについて問い合わせたものです。

東京教育委員会は、国分寺市教育委員会が都の委託事業であることを考慮し、実施しないものと理解していません。

見事なまでのお役所文章である。数々の圧力をかけた形跡があるにもかかわらず、決定責任はすべて国分寺市にあると言い切っているのだ。

上野 回答者はご自分が地雷を踏んだということに気づいてないみたい。この人も石原都知事以前ならこういう判断はしなかったのではないのでしょうか。

田中（東京の）ウイメンズ・プラザの事業内容も石原都知事になってからずいぶん変わりましたね。今度その変化についてリスト化してみようと思ってるんですよ。

上野 それはすごくいいですね。私が以前仕事をしたこともある東京都女性財団も、石原都知事になってからは行革の名の下に解散させられました。

問題なのは都の中間管理職が知事におもねって「翼賛体制」化していることです。女性財団をつぶそうというアイデアもそういう中の一人が、知事の意を汲んで出したものとか。こういうことはトップが替わればまた変わるということでもありませんが。

田中 ウイメンズ・プラザにもヤクザみたいな都議会議員が来て、事業についてイチ

ヤモンをつけたって話もありましたね。そんなふうには部下が動いていることを知事は知ってるのかしら。

上野 当然想定しているでしょう。でも何かあっても、部下が勝手にやったことで「オレは知らないよ」としか言わないでしょうね。

バックラッシュには  
マニユアルがある

田中 今、フェミニズムへのバックラッシュがひどいでしょう、だから何か効果的なことをしなければと思うのですが。

上野 バックラッシュにはマニユアルがあるんです。たとえば地方議会などでは、一人でも変な議員がいてジェンダー・フリー叩きの質問に立つと、女性行政の担当職員などはそれだけで萎縮してしまう。どこへ行っても同じようなマニユアルどおりの質問ばかりですね。

また（男女共同参画などの）条例つづしにかかる。みな同じパターンです。この動き、地方にバックラッシュが波及しているようですね。

田中 ジェンダーとジェンダー・フリーという言葉が標的になっている。  
上野 実はそこが一つ問題

点でもあるのです。「ジェンダー・フリー」を使う人と使わない人の間には今のところまだコンセンサスがありません。

「ジェンダー・フリー」は和製英語で、行政や教育界で使われる言葉です。学者の世界にはない言葉ですし、グローバルスタンダードでもありません。だからここを突かれると反論することが難しいわけで、攻める側はうまいターゲットを見つけたものだと思います。

また学問的には「ジェンダー」と「ジェンダー・フリー」は別物なのですが、攻撃側の本当に攻めたい部分は「ジェンダー」だったのだということとが最近になってはつきりわかってきました。

田中 なりふりかまわず、って感じでしょうかね。

ジェンダーは一般的に「社会的性差」と訳される。生物学的な性差ではなく、生まれながら置かれる環境や教育によって身につく性差のこと。

ジェンダー・フリーは男女いずれもが、社会的性差のために不利や差別をこうむることのない状態を指す。

その内容をわざと曲解して、「着替えまで同じ部屋でさせている」などと攻撃する

人々がいる。女と男が何を共同し、どこで分離して教育するのがベストなのか、この問題はより冷静に、科学的・社会的に検討することが必要だろう。

フェミニズムと  
日本社会

上野 私は思想（またはイデオロギー）が世の中を変えたいとは思っていないんです。フェミニズムという思想があったから、あるいは法律があったから日本の女が変わってきたから日本の女が変わったわけじゃない。それ以前に女のほうが変わっているのです。だからジェンダーについてどんなにバッシング派が圧力かけて、表面上は勝ったようになかたちになっても、日本の私たちの変貌をおしよすことは不可能ですよ。

田中 うーん、でもいろんな運動をしている女性たちがいることも無視できないと思うんだけど。

上野 私はリアリストですからね。田中さんだってそうでしょう？

田中 私は上野さんが思っているよりは理想主義者かも。（やまぐちりょうこ・フリーランスライター）

●「週刊金曜日」3月17日号に、47歳の男性が「最近の本屋さんを見ると、右翼的な本ばかりが目飛び込んできます」と投稿しています。まさにそのとおり、いまや「右傾化」言論は花ざかり。かつては「中道派」だった「VOICE」まで、最近の「右傾化」はときとして「諸君！」そのけ。しかも単行本には「戦争物」「戦略物」が多く、それらは必然的に「勝負の論理」つまり「右翼的思考」と結びついていきます。しかしこの事実で国民全体が「右傾化」していると判断するのは、いささか時期尚早だと思います。

●思えば戦後約30年、「左翼的」言論はこの国の論壇を風靡していました。そしてマジヨリテイはいえば、「左翼思想」がどれほど本屋の店頭を占拠していても「笛吹けど踊らず」。学生運動を除いて、知識人の言論は天上の言葉遊びでした。

●現在もまた、言論界の「右傾化」と国民との関係は、かつての左翼の隆盛を裏返したかたちになっています。言論界でのタカ派の跳梁は著しいのですが、意識調査が毎回明らかにしている事実は、日本人の心の奥底に根づいている平和志向の深さです。その意味で言論界の「右傾化」と国民との間には、かつての「左翼」と国民との間に見られたと同じ乖離が存在しています。ただし大きな差は、首相を含む自民党の「タカ派」と、「右翼知識人」とが響きあっていることで、誘導いかによっては、それが国民全体のはっきりした「右傾化」を誘い出すかも知れません。いまこそ日本人が、どちらへ動きだすかの正念場です。

●「ハト派」の弱点は、口を開けば「護憲」と「九条改正反対」だけをくり返していることです。「タカ派」のように、新しく展開する事態への反応を具体的に語ることがなく、理念的に「平和」を語るが多すぎなのです。

「タカ派」の攻撃は主として中国を仮想敵国としており、そして中国は都合よく、ときどき日本人の反発のタネになる行動をしてくれます。

「ハト派」は「敗北主義」のレッテルを張られることなく、そうした中国にどんな対応を取ることができるのか。国民の心をつかむためには、問題の起こったとき黙っていてもダメなのです。「平和」を守る一点は崩さずに、説得性のある議論を繰り返す——そのためには「ハト派」の望む社会像の具体的スキームをしっかりと踏まえつつ、それに沿って議論を展開することが必要でしょう。

日本人の心のそこに潜む平和主義は、軍事力による世界支配をもくろむアメリカに追随することを決して喜んではいません。その心がかめれば「ハト派」は勝利するのです。

## 女の政治日誌

—1月から3月まで—

▼耐震強度偽造事件の余波は

今年になっても工事関係者に広がり世間を騒がせた。偽造建物に住む住民の被害は最終的にどうカバーされるのだろうか。「自己責任」という言葉がどう、使われるのか、頭が痛い問題である。

▼「ホリエモン」こと堀江貴文氏が、1月東京地検に逮捕された。いつものことながら、マスコミ文化人の手の裏を返したような反応が浅ましい。

▼防衛施設庁の空調設備工事発注に関する「談合」で、同庁ナンバー3の実力者官僚が摘発された。公共工事に関する官庁と業者との癒着は、いまだに日本至るところで行なわれているだろう。公共工事を回してくれた政治家に対するゼネコンの謝礼・3%の数字は公然の秘密である。

▼こうした不祥事が明るみに出る裏には、必ず「内部不正」に踏み切った人物が存在するわけだが、この3月、公務員に関するかぎり、新聞記者に「取材源の秘匿」を認めない

という地裁判決が出て、世間を嘩然とさせた。こうした人が「裁判官」のポストについているおそろしさを思う。

▼女帝容認のため皇室典範改正——と準備するなかで秋篠宮妃の妊娠。

日本の前途を左右するわけでもないこの問題が、どうしてこんなに騒がれるのか。誰が天皇家の跡継ぎになるかで、国の運命が左右されるわけでもなからうに……。

▼民主党水田議員のガセネタメール事件。この責任は水田議員の質問を容認した民主党幹部にもある。とかげの尻尾切りで解決しようとしたら党の誠意が疑われるだろう。

▼米軍の受け入れを巡って住民投票が行なわれた岩国市の住民が、圧倒的多数で受け入れを拒否。小泉首相の対応が見もの。

▼沖縄から Guam に移転する海兵隊8000人の移転費用が1兆1800億円。そのうち何と75%の支払いを日本に要求してきたアメリカには呆れる。